

見て喜びを感じさせる絵を  
描き続けたい

## ワベ・シゲヨシさん

(上三谷出身・アメリカ在住)



「私の好きな色は、エメラルドグリーンなんです。それは、幼いころに父親とよく魚釣りに行った瀬戸内の海の色です。」こう語るワベ・シゲヨシ(本名 渡邊繁吉)さんは、伊予市上三谷出身。現在はアメリカに在住し、奥さんと5人のお子さんと暮らしながら、画家として活躍しています。

「小学校4〜6年の担任が偶然同じ美術の先生で、いつも私の絵をほめてくれたんです。それが自分の絵もいんだなあという自信を持つきっかけだったかもしれません。どうしても油絵を描きたくて、中学2年のときに道具を買ってもらい、家



▲玉川ダム(現 今治市)の桜と菜の花を描いた「平和な春の日」と題した絵を市に寄贈していただきました。(9月16日)

で本を見ながら、自己流でどんどん描いていました。」そして、松山南高校に進学後、16歳で画家になる決心をしたそうです。「親は反対しましたね。食べていけないから。でも、たとえ食べていけないくてもやりたい、画家にならせてくれと訴えたんです。」

その後、東京の美術学校に通いますが、友人がヨーロッパへ渡ったことに刺激を受けて、ワベさんも23歳でアメリカへ留学。しかし、「アメリカに行つてすぐに絵が売れるなんてことは奇跡。だから、路傍で似顔絵描きをしたり、絵を画商に安く売ったりと苦労しました。」そんな中、ギ

ャラリーのひととの出会いがあり、最初はグループ展から、続いて個展の開催へと着実に実績を積んでいきました。そして、1987年には、文化的功績により、テキサス州ダラス市から名誉市民賞を受けました。「これまで絵で食べてこれたのはフッキーです。根底に絵を描くことが好きというのがありますけど、ただ好きというだけではやってこれなかったんじゃないかな。人間は出会いで道が開けることが多いです。私も、ギリギリのときにいつも誰かに出会って道が開けてきたんですよ。」

ここ数年は、展示会のために年に4・5回は来日するなど、多忙な日々を送るワベさん。9月には、長年望んでいた故郷愛媛での展示会が実現しました。会場には、アメリカの自然を色彩豊かに描いた風景画や平和を象徴する母子の絵、玉川ダムの桜と菜の花や大洲の富士山のつつじの絵なども出展されました。

そんなワベさんの画家としての姿勢は、「芸術家は、自己表現ばかりしてはいけない。芸術は、見た人がなぐさめられたり、喜びを感じたりと、心が引き上げられるようなものであるべき。」ということ。今後この姿勢は変えることなく、さらに、古典、現代、東洋、西洋などのさまざまな表現を融合した新しい表現を創り上げていきたい、と情熱をもって語ってくれました。